# 「伝統的な言語文化」の学習を広げる教材開発

西　一夫

## 一　はじめに―「伝統的な言語文化」の位置付け

平成二十年三月に小学校・中学校の学習指導要領の改訂が行われた。さらに翌年の三月には高等学校の学習指導要領の改訂が行われている。学習指導要領は約十年ごとに改訂が行われ、現行の学習指導要領は平成十年以来の改訂となる。この改訂で注目されたことの一つに、三領域（話すこと・聞くこと、書くこと、読むこと）と一事項とからなっていた構成に変更がなされて「言語事項」が「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」と大きく名称の変更がある。この事項の名称変更を受けて学習指導要領解説では、次のような説明がなされている。

〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕は、我が国の歴史の中で創造され、継承されてきた伝統的な言語文化に親しみ、継承・発展させる態度を育てることや、国語の果たす役割や特質についてまとまった知識を身に付けさせ、言語感覚を豊かにし、実際の言語活動において有機的に働くような能力を育てることに重点を置いて構成している。（『中学校学習指導要領解説　国語編』平成二十年）

この解説で注意しなければならないのは、「歴史の中で創造され、継承されてきた」ものが「伝統的な言語文化」であると位置付けている点であり、さらに「言語文化」を次のように定義している。

我が国の歴史の中で創造され、継承されてきた文化的に高い価値をもつ言語そのもの、つまり文化としての言語、また、それらを実際の生活で使用することによって形成されてきた文化的な言語生活、さらには、古代から現代までの各時代にわたって、表現し、受容されてきた多様な言語芸術や芸能などを幅広く指している。（同右）

このように「言語文化」を時間軸では「古代から現代」、分野では「多様な言語芸術や芸能など」と幅広く位置付けている点に注意しなくてはならない。

現行の学習指導要領での「伝統的な言語文化」が、「古典」に「親しみ、継承・発展させる態度を育てる」ことと読み替えられている傾向は、古典重視との理解を生む。このような背景には「古典に関する教材については、古典の原文に加え、古典の現代語訳、古典について解説した文章などを取り上げること。」（『指導計画の作成と内容の取り扱い』）『中学校学習指導要領』に力点を置いて解釈されている可能性もあるだろう。その結果、古典学習の促進、前倒しなどと批判される一面も存するのである。だが、「我が国の言語文化に親しむことができるよう、近代以降の代表的な作家の作品を、いずれかの学年で取り上げること。」（「内容の取り扱い」）や先掲の解説を丁寧に読み解くならば、そうした趣旨で「伝統的な言語文化」が設けられているのでないことは十分に理解できるはずである。しかも「伝統的な言語文化」の学習は三領域を通して行われることが明示されており、「読むこと」における読解的な学習指導とはならないように位置付けに配慮が見られる。

「伝統的な言語文化」には、さまざまな可能性がある。そうした可能性は古典を学ぶだけではなく、「伝統的な言語文化」を通して現代を再認識することにもつながるだろう。かかる観点から、「伝統的な言語文化」の学びを広げるための教材開発について、これまでの教材研究や授業実践から得た成果を紹介しながら検討をおこなう。

## 二　身近な存在から考える―地名からの学び―

「伝統的な言語文化」を学ぶための教材は周辺に多く存在する。例えば、普段から生活する地域や学校周辺の地名などがある。

平成二十六年に横浜市立南高等学校附属中学校にて中学校二・三年生と「伝統的な言語文化」を学ぶ基礎作りをしたことがある。校舎が丘陵地にあり、近隣には「相武山」という名前の山が存在し、その名を持つ小学校（相武小学校）までもがある。附属中学校がある地名は「東永谷」、これは古地名では「相模国鎌倉郡」の地名「永谷」として存在する由緒あるものであることが知られ、戦国時代まで遡る地名なのである。神奈川県は旧国名では相模国と武蔵国とからなる。古地図などで確認すると尾根がおおよそ二つの国を分ける存在であることが知られた。つまり、現在の山の名前「相武山」は、

「相武山」（相武山小学校）→**相**模国＋**武**蔵国

と出来上がってきたと推測される。学校の前にある道はおおよそ尾根伝いであり、古くは二つの国を分ける国境

に相当する存在であった。それ故、地名の分布も「相模大野」「相模原」などは相模国、「武蔵野」「武蔵小杉」「武蔵白石」などは武蔵国の地域に残る地名であると知られる。訪問校は広範な地域からの通学生がいるため、その道に沿っていずれの旧国に住んでいるかを確認することによって、新たな人間関係が生じることとなった。

このように具体的な地域地名を取り上げながら地理的な学習ではなく、歴史の中で継承されてきた「言葉」を学ぶことを通して、地域に対する新たな価値付けをすることができよう。このような学習は埼玉県を含む旧国名「武蔵国」と長野県の旧国名「信濃国」との比較などからも導ける。いずれにも共通しているのは海に接していない点、また古くはいずれも「東山道」に属する点が挙げられる。相違点としては政令指定都市の有無などがあろうか。時代を超えてさまざまな情報を較べたり確かめたりしながら生活する地域を考える契機となる。

生活と関連を有する「言葉」を教材として活用していくことが、「伝統的な言語文化」を身近に捉えることができ、本来の趣旨に添って学びを深めて行くことが可能になるのだろう。

## 三　言葉遊びの面白さ―平仮名・漢字・訓読み・音読み―

日本文化などを知るテレビ番組が増え、これまで伝統的に承け継がれてきた作法や所作を見直す機会が増えている。そうした中で「言葉遊び」への注目もおこなわれている。日本語は多様な表記手段を持ち、その特性を活かした「言葉遊び」が生まれてきた。そうした中でよく知られる言葉遊びの一つは「このはしわたるべからず」（一休宗純）であろう。アニメ番組などでも取り上げられ、人口に膾炙したものである。言うまでもなく「はし」には「橋」と「端」とが掛けられており、和歌の掛詞を散文に応用している。漢字の同訓異字による言葉遊びの例である。

また、漢字自体に対する「言葉遊び」の要素が見られる。後奈良天皇『後奈良天皇御撰名曾』には、漢字の部首や頓知を効かせた「なぞなぞ」が納められている。漢字の偏と旁とを用いて漢字を考えるものである。例えば次のようなものがある。

紅のいとくさりてむしとなる。なぞ。

「紅」の偏である「糸」が腐って「虫」になると「虹」が再構成される。このように漢字の偏と旁とを分析的に捉えて漢字を創り出す学習として位置付けられよう。

また、やや応用的な文字の言葉遊びとして、更に難易

度の高い例を紹介する。

①あらしは山を去って軒のへんにあり。なそ。

②竹生嶋には山鳥もなし。なそ。

③一寸一尺になる家はいかなる家か。なそ。

④道風かみちのく紙に山といふ字をかく。なそ。

まず①は漢字「嵐」から「山」を取り去って「軒」の偏と合わせる。「嵐」から「山」を外せば「風」、「軒」の偏、つまり「干」を取れば「車」が残る。これらの残りを取り合わせれば「風車」という熟語が出来上がる。②では地名「竹生嶋」に「山鳥」がいない、つまり「嶋」が「山鳥」となり、残る「竹生」は、二つの漢字を合成して「笙」という和楽器名が出来上がる。二つは漢字の偏と旁とを用いて、さらにそれぞれの部品を重ねたり併せたりすることで異なる漢字に仕立てる作業である。類似の例は④である。「道風」から「みちのく（道退（の）く）」と「風」が残り、「山」を書く文字であるから「嵐」となる。先掲の①と同じ漢字が答であるが、やや言葉遊びの要素（道退（の）く）が強く難易度が高いと言える。最後の③は漢字と数字とを組み合わせて考えるなぞなぞである。「一寸一尺」とは「一尺」が「十寸」であり、合計が「十一寸」となる。これを重ねることで「寺」という「家」が現れることになる。

このような言葉遊びは漢字学習の一環として取り上げることで「伝統的な言語文化」に親しむ機会を創出することとなる。さらに趣向を凝らした言葉遊びとして「いとし、いとしといふこころ」を漢字に直す学習もあるだろう。「いとし」は「糸」、「いふ」は「言ふ」、「こころ」は「心」であり、これらを総合すると「戀」となり、現在の「恋」の旧字体となる。このような漢字の字形に基づく学習は、「言葉」の本質に迫る学習ともなる。萬葉学者の伊藤博（はく）は「恋」に関わって次のような文章を残している。

「恋」は旧漢字では「戀」と書いた。旧制中学時代、この文字を解いた「糸し糸しと言う心」というたわいもない歌をよくうたったものだが、「恋」の本質を説いてなかなか妙を得ている。

これと相似る事柄は萬葉集にもあって、萬葉びとは、「恋」を表記するのに「孤悲（こひ）」という萬葉仮名をしばしば宛てた。

明日よりは　我（あ）れは孤悲なむ　名欲山（なほりやま）　岩踏（いは）み
平（なら）し　君が越（い）え去なば　（9・一七七八）

おほほしく　君を相見て　菅の根の　長き
春日を　孤悲わたるかも　（10・一九二一）

などがそれである。これは、「恋」が好きな人と離れていて「独リ悲シム」嘆きであったことをすこぶる美しくかつ端的に示したもので、その簡潔至極さにお

いて古今東西に卓越していると思われる。

（伊藤博「恋」『萬葉のいのち』塙書房、昭58）

このような近代以降の文章を読むことで「言葉」の豊かさや価値を再発見する機会となる。先掲「近代以降の代表的な作家の作品を、いずれかの学年で取り上げること」（「内容の取り扱い」）で示されるような教材として用いることが可能なのである。文学研究者等が啓蒙的な観点から書いた文章（解説文・エッセイ）等が一層活用されることが望まれる[三]。

「言葉」を基軸として学ぶ「伝統的な言語文化」の教材は、既存の教科書教材からも見直しができるだろう。

帝、「さて、何も書きたらむものは、読みてむや」と仰せられければ、「何にても、読み候ひなむ」と申しければ、片仮名の「子」文字を十二書かせたまひて、「読め」と仰せられければ、

子子子子子子子子子子子子

と読みたりければ、帝、ほほゑませたまひて、ことなくやみにけり。

（『宇治拾遺物語』）

高等学校の古典の入門教材としても知られる説話である。当然のことながら、この教材の眼目の一つは、

「ねこの子のこねこ、ししの子のこじし。」の読み方

が、なぜ「子文字十二」を読んだことになるのか、説明してみよう。また、ほかにどのような読み方が可能か、考えてみよう。

（『新編古典B』古B313、大修館書店）

のように、波線部をどのように読んだかにある。このような学習課題を漢字の読みと合わせて、後者で求められる「ほかにどのような読み方が可能か」に焦点化することも教材化の可能性としてあるだろう。

いずれにしても「子」の漢字の読み方として、身の回りにはどのようなものがあるかを確認する、すなわち身近な「言葉」から古典の世界へと導くのである。

提示するならば、次のような語彙が考えられるだろう。

A・杜子（し）春　B・花子（こ）とアン

C・子（ね）丑寅…　D・椅子（す）

おおよそ四種類（し・こ・ね・す）の読み方があることに気付く。これらを基にして名詞を作る（ねこ・すし・こねこ・こし等）。また動作を表す言葉を作る（死ね・こねこね・こし（こす）等）。これらの語彙を適宜助詞を補いながら求めに応じた十二文字で意味を構成するように仕上げる。

子猫寿司こね、少しこね（子猫が寿司をこねる、少しだけこねる）

子猫死ね死ね、子猫死ね

猫子猫、寿司少しこね（親子猫が寿司を少しだけこねる）

など、語彙を組み合わせて十二文字の作文に挑むことができる。語彙を豊かにする学習としてこのような古典作品が持つ課題を活用することができるのである。また十二文字であることから六文字で完結させて繰り返しにする、あるいは二文字の単語を繰り返して構成するなど、言葉の組み合わせや繰り返しの効果を感じ取ることができるだろう。古典を読解だけに用いるのではなく、義務教育段階の学習活動においても積極的に活用できる可能性は十分にあるだろう。

## 四　「学び」を深めて広げる

### ―平泉（『おくの細道』）の学習―

作品と向き合うことを通して「伝統的な言語文化」に対する理解を深める学習も可能である。中学校・高等学校の重複教材の一つである『おくの細道』の「平泉」を手がかりにして考える。

三代の栄耀一睡のうちにして、大門の跡は一里こなたにあり。秀衡が跡は田野になりて、金鶏山のみ形を残す。まづ、高館に登れば、北上川南部より流るる大河なり。衣川は、和泉が城をめぐりて、高館の下にて大河に落ち入る。泰衡らが旧跡は、衣が関を隔てて南部口をさし固め、夷を防ぐと見えたり。さても義臣すぐってこの城にこもり、功名一時の草むらとなる。「国破れて山河あり、城春にして草青みたり」と笠打ち敷きて、時のうつるまで涙を落としはべりぬ。

夏草や兵どもが夢の跡
卯の花に兼房見ゆる白毛かな　曾良

松尾芭蕉が『おくの細道』の旅で定めた大きな目的の一つが、この平泉訪問[四]にあった。その意味で芭蕉は最も力を入れて「平泉」を仕上げたはずである。その予測に違わぬ表現が凝らされている。自然と人事とを対比しながら情景を描写していき、人事は「大門の跡」「秀衡が跡」「泰衡が旧跡」などの表現によって既に滅び去った存在であることを印象づけている。対する自然は「金鶏山のみ形を残す」「南部より流るる大河なり」等、いまなお在り続ける存在としてある。芭蕉の筆はこれらの光景を「功名一時の草むらとなる」と栄光から荒廃へと人事は変化するのに対して、変わることのない自然の姿を対比的に定位している。この情景を杜甫の「春望」の対句を引用することで象徴的に述べて芭蕉の発句へと展開している。芭蕉が引

用する杜甫の「春望」は後半の句に異なりがあり、一般には「城春にして草木深し」と理解されているのだが、波線部のように「草青みたり」とある。人口に膾炙した名句の異なりを、続く芭蕉と曾良の句との関係で位置付けてみることも可能であろう。

芭蕉と曾良の句は、散文と同様に対比的な関係が認められる。つまり、「夏草」に対して「卯の花」、「兵ども」に対して「兼房」という語句の対比が見られる。一面に広がる山に生い茂る「夏草」に対して、おそらくひっそりと咲く一輪の「卯の花」、奥州藤原氏の「兵ども」に対して「兼房」という一武将を取り合わせる。いずれも芭蕉は対象を巨視的に捉えており、曾良は微視的に捉えていると考えられる。芭蕉が広々とした平泉の景を詠み上げるの対して、曾良は一輪の卯の花に類似の思いを寄せていると読めるのである。

俳句は取り合わせの面白さや表現の転換が重要である。そうした表現の対比関係を見出すことも、古文や漢文を読む視点となるであろうし、現代文などを読み解く際にも有効な方途となるはずである。作品内容を理解することも重要であるとともに、作品の表現の特徴や効果を学習の主眼と捉えることも有効な学習活動と位置付けられるだろう。

先の杜甫「春望」の「草青みたり」は、芭蕉の発句「夏草や」を理解する際に有効であろう。「夏草」として取り上げられているのは野山に生い茂る草である。夏の太陽を浴びながら成長しているのであろう。その草は詩句の異同のように「青み」なのであろう。青々とした草の色は、曾良の「卯の花」との更なる対比を生み出すこととなる。

古典を考える際の知識として五行思想がある。方角と色彩、守護神、季節を対応させて理解するものである。方角を主にそれぞれの対応関係（色彩・守護神・季節）を示せば次のようになる。

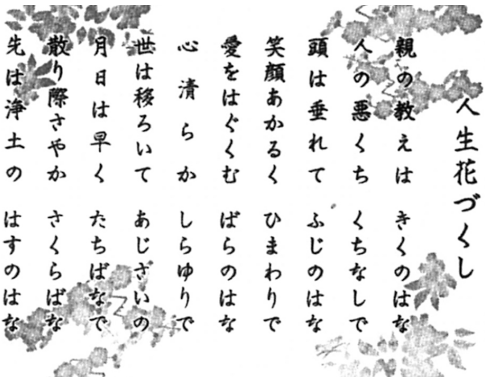
東：青・青龍・春
南：朱・朱雀・夏
西：白・白虎・秋
北：玄（くろ）・玄武・冬

芭蕉の青々とする「夏草」（東）と曾良の「卯の花」（西）とにある程度の対応関係を認めることは可能だろう。正解として解釈があるのではなく、「伝統的な言語文化」の一端を学ぶ素材として教材解釈を試みたのである。このような対応関係は大相撲でも生きており、つり屋根の大房は四色である。また歴史的知識として皇太子を「東宮・春宮」と表記していること、さらには現在でも使用する熟語の「青春」が、かかる考えを背景とすることは明らかで

あろう[五]。

「学び」を深めて広げることによって、教材が持つ力や魅力を高めることになるはずであろう。そうした教材の位置付けは、身近なものにも認められる。

ここに示したのは、某居酒屋のコースターである。「人生花づくし」と題され、おおよそ人間の一生を花と取り合わせて七・五のリズムで十句にまとめられている。ここには和歌の掛詞の要素や同音反復、素材が持つ印象と表現の関係など、多様な日本語表現が見られる。だが、取り上げられている花が持つ印象やより日本的であるかなどを検討すると、なお教材としての価値を高めることが可能であるように思える。




数次の検討の結果、試案としての改作は次のように整理された。

親の教えは　きくのはな
人の悪くち　くちなしで
頭(こうべ)は垂れて　ふじのはな
笑顔ほころぶ　うめのはな
恋をはぐくむ　なでしこの
心清らに　しらゆりの
世は移ろいて　あじさいの
月日は早く　たちばなで
散るは鮮やか　やまざくら
ゆくは浄土の　はすのはな

このような改作課題においては、花の特徴を調べたり、音の関係性を分析したりと学習活動が多様化してくる。そうした言葉の学習を通して言葉を豊かにしていくことが実現すると考えられる。

## 五　古典の世界とつながる現代(いま)

### ―『羅生門』の季節を考える―

「伝統的な言語文化」が目指す内容には、「言語感覚を豊かにし、実際の言語活動において有機的に働くような能力を育てること」（『中学校学習指導要領解説 国語編』平成20年）との内容が含まれている。「伝統的な言語文化」

によって継承されている「言葉」の由来や背景を知ることで、自らの言語生活を豊かにすることとなる。現代の思考と古典の世界で考えられてきたこととが、どれほどの距離を持っているのか、大きな隔たりとなっている要素もあれば、一方で数百年前の思考と何ら変化が見られないものもあろう。典型的な例を示せば、「春の花」と言われて多くの人が想起するのは「桜」である。これは『古今和歌集』の春の歌巻（上下）においても傾向は変わらない[六]ことからすれば、一千年前の人びとも春の花と言って多くの人が「桜」を想起している現実がある。その意味では、古典と現代との隔たりを強調するばかりではなく、変化のない部分に光りをあてることも、「伝統的な言語文化」の学びを深めることであろう。

このような課題意識から高等学校「国語総合」の定番教材となっている、芥川龍之介の「羅生門」を素材に「伝統的な言語文化」の学びを広げ、深めるあり方について、実践[七]を踏まえて述べることとする。

ある日の暮方の事である。一人の下人が、羅生門の下で雨やみを待つていた。

広い門の下には、この男のほかに誰もいない。ただ、所々丹塗（にぬり）の剥（は）げた、大きな円柱（まるはしら）に、蟋蟀（きりぎりす）が一匹とまっている。羅生門が、朱雀大路にある以上は、この男のほかにも、雨やみをする市女笠（いちめがさ）や揉烏帽子（もみえぼし）が、もう二三人はありそうなものである。それが、この男のほかには誰もいない。（芥川龍之介「羅生門」）

この「羅生門」の冒頭一節から、小説の舞台である平安京の季節を推定する学習活動である。季節については作品内では明確に示されておらず、いくつかの手掛かりになりそうな素材（表現）から読者が推定しているに過ぎない。そうした読みの過程を顕在化して、自分の解釈として提示しながら、さまざまな交流活動を通して平安時代を舞台とする近代小説の世界を味わうことも「伝統的な言語文化」の学びとして位置付けられるだろう。

小説の季節を考える場合に示すのは、以下の要素である。

①物語の舞台となる平安京の「季節」はいつであるか、自分の読みで考えること

②その季節であると考えるための「根拠」となる表現を抜き出すこと

③説得力を増すために、周囲の生徒との意見交換をして自分の考えに対する意見を複数聞くこと

このような条件付けで「季節」についての傾向は、春と冬を選択する学生は少数派で、夏と秋に集中する。傾向としては秋が多めに出ている。その際に「根拠」として取り上げる表現は「雨」「蟋蟀」「夕暮」が大部分を占めている。

説得力を増すための意見交流活動では、同じ季節を選んでいる人、異なる季節を選択している人、それぞれかとの意見交流をおこなう。自分自身で気付いていない新たな「根拠」を加える学生、論述の脆弱さを補強する学生等が見られる。しかも一五〇字以内の制限があることから、冗漫にならない記述が可能となる。最終的には夏と秋に集約され、当初の傾向と変わらず「秋」の多さは変わらない。

このような活動を受けて、筆者が考える「根拠」を明示しながら解説を加える。「根拠」とした要素は三点である。

まず冒頭の「ある日の暮方」である。このような時間設定が印象に残るのは、清少納言『枕草子』冒頭の「秋は夕暮れ」であろう。『古今和歌集』とは異なる価値観で記述されているものの、後世の文学に大きな影響を与えた。その端的な例が『新古今和歌集』の「三夕の歌」である。

心なき身にもあはれは知られけり鴫立つ沢の秋の夕暮れ（西行法師）

見渡せば花も紅葉もなかりけり浦の苫屋の秋の夕暮れ（藤原定家）

さびしさはその色としもなかりけり槙立つ山の秋の夕暮れ（寂蓮法師）

「夕暮れ」と言えば「秋」という価値観が明確に示されている。

第二の「根拠」は「蟋蟀」である。これが現在のコオロギなのかキリギリスなのか判然としない部分が残るのだが、以下のような和歌表現から考えを推し進めることも可能であろう。

蟋蟀いたくな鳴きそ秋の夜は長き思ひは我ぞまされる（古今和歌集・秋上・藤原忠房）

秋の夜の寒きまにまに蟋蟀露を恨みぬあかつきぞなき（宇津保物語・嵯峨院）

いずれもが秋の夜にもの思いする際に登場する存在として詠まれている。やはり「蟋蟀」と調和する季節は秋である。

最後の「根拠」は「もの思いする下人」である。中国の漢代に成立した思想書『淮南子』には次のような文言がある。

春ハ女悲シンデ、秋ハ士哀シンデ、物化ヲ知ル。

「物化」とは「モノの変化のありさま、様子」であり、「知る」とは「理解する」ことである。つまり、中国の陰陽五行説

に拠って、春は女性がもの思いする季節、秋は男性がもの思いする季節、と対比的に理解されている。つまり、男性は秋にもの思いするという知識が広く定着していたのである。

以上のような「根拠」に拠って「羅生門」の冒頭で読者に強く印象づける季節は「秋」との結論を導いている。これは正解ではなくあくまで作品を理解するための一助なのである。ならば、慶応生まれの芥川龍之介が様々な古典に親しみを持って接し、それらの要素を自身の作品に取り入れた(反映させた)と推測することも可能であろうか。これを受けるならば、「夕暮れ」と言う時間設定には「昼と夜」の区分、「羅生門」という場所の設定には「洛中と洛外」という区分、という「境界」に位置する下人の物語として読み始められる。盗人となるのか否か、そうした境界にある男の物語としてあるのだろう。私たちはこの小説を無意識の中である程度の季節を意識しながら読み進めていることになる。

## 六　おわりに―明日の「伝統的な言語文化」のために―

「伝統的な言語文化」が登場した頃には、ざまざまな特集で記事が組まれた。すでに五年が経過し、新しい学習指導要領に向けての意識が高まりを示している。新たに設けられたこの事項内容によって、「古典嫌い」は解消したのか、その結果は現在も示されていない。古典（古文・漢文）を学ぶ意義を積極的に見出せない生徒が七割を超える状況から改善が図られているのか、あるいはさらに増加したのか。

古典の枠組みでは覆いきれない要素を「伝統的な言語文化」は持っている。それを有効に活用するためには、従来の教材の見直しや新たな教材発掘が求められている。それは言うまでもなく、教員のものの見方や考え方であり、さらには児童・生徒の素朴な疑問に真摯に耳を傾ける姿勢でもあるのだろう。

（平成二九年二月三日稿）

一　現在の埼玉県は海に接していないものの、武蔵国は海（現在の東京湾）に接している。

二　武蔵国は後に東海道に属することとなる。

三　ここで紹介した伊藤博『萬葉のいのち』は、短いエッセイとして歌の「言葉」に即した文章が多く納められてる。また、『萬葉集』に即しながらも広く古典全般や現代の我々に対する思いを綴る犬養孝のエッセイなどは教材として活用できるものである（『万葉風土

明日香風』現代教養文庫、昭51年等）。

四　尾形仂『芭蕉のこころをよむ「おくのほそ道」入門』（角川ソフィア文庫、平26年）参照。

五　このような漢字の由来や用法をわかりやすく解説したものとして、興膳宏『平成漢字語往来』（日本経済新聞出版社、平19年）があり、教材としての活用が可能である。

六　このような観点からの学習指導のあり方については、山下直「国語総合における古典の学習指導の観点」（「月刊国語教育研究」四六八号、平23年4月）が参考となる。

七　本実践は平成27・28年度の信州大学全学教育機構の開講科目（主に一年生対象）である「言語教育の観点から学ぶ人間と世界」での実践を基にしている。

附記

本稿は、文教大学国語教育研究集会（平成二十八年八月六日）における同題の講演に基づき、新たな知見や実践を取り込んで稿を起こしたものである。

本稿は、平成二十八年度信州大学教育学部附属次世代型学び研究開発センター「実践研究支援プロジェクト」（課題名「中高連携を視野に入れた伝統的な言語文化関連教材開発」代表者　鎌倉大和教諭）の助成を受けたものである。

（信州大学教授）

# 文楽鑑賞教室

私は今回の文楽鑑賞教室で「曽根崎心中」を鑑賞した。本編前の文楽の魅力では文楽で使われる人形の紹介がされた。毎年この文楽鑑賞教室は観に行っているが、今回の紹介の中で特に驚いたのは女人形には足がないという点である。文楽鑑賞教室も毎年同じ紹介ではないため、この事実を知ったのは初めてであった。（三人遣いの場合）足遣いと呼ばれる人形を操っている三人のうち一人が女人形の両足を着物の中の足の動きを両手で表現している。例えば、女人形が座るときは両掌をそろえて握って女性の両膝を表すといったように、女人形のしぐさに合わせてあたかも足があるかのように表すのである。もちろん足遣いだけでなく主遣い、左遣いと呼ばれる他の二人も頭や腕を動かし、呼吸のあった動きによって女性のなまめかしさを表現しているのである。今回聞くまで気づかなかったほど自然に足が表現されているのである。

物語が始まると、昔の言葉や吟じているような言葉は現代に生きる私には聞き取りづらいが、国立劇場の舞台袖に字幕表示があり、見ながら聞いているとだんだん耳が慣れてきて、字幕なしでも聞き取れ物語に入り込めて行けた。物語が進んでくると、文楽の魅力で聞いた女の足であったり、以前の鑑賞教室で聞いた音楽であったりの様々な演出も感じることができ大変面白かった。文楽は歌舞伎に比べ圧倒的な迫力や派手な演出は劣ることが多いと感じる。しかし細やかな仕草などは生きているようで、また違った面白さがあると思う。この鑑賞教室で初めて文楽を知ったような私でも興味が深まり、とても良い機会だったと感じた。

（国語三年　依田木の実）